The Buried Giant における虚構の自我

Kazuo Ishiguro 作品における「変身願望」のテーマをめぐって

肖　軼群

はじめに

本論では、Kazuo Ishiguro の *The Buried Giant* (2015)を取り上げ、今まで注目されていなかったサクソン人戦士 Wistan とサクソン人の孤児 Edwin に着眼する。戦争記憶との向き合い方という大テーマを持つ本作品だが、二人の登場人物に焦点を当てることで彼らに共有されるアイデンティティを変えたいという深層欲求、並びにその手段として用いられる「虚構される記憶」を分析し、さらに前後作品との比較を通して、イシグロ文学の底流として変化し続けるアイデンティティ変化の問題、そしてそこから垣間見える作者の人生観を解明する。

1. Wistan と「真のサクソン人」の虚構

サクソン人戦士である Wistan はサクソン人の血を引いているが、ブリトン人の元で育てられた。剣術や言語においてブリトン人と何らかの違いもない彼は、ブリトン人とサクソン人の混住が珍しがられる環境の中では異様な存在である。この特殊な生い立ちがのちの彼のアイデンティティ認識を大きく左右することになる。表向きではブリトン人に親切に接している彼だが、かつて起こったブリトン人によるサクソン人虐殺の記憶を持っているためブリトン人に並々ならぬ憎しみを抱えている。Wistan はこの憎しみをベースに、「真のサクソン人」の定義を作り上げる。“brave”や“hero”などの表現が頻繁に用いられたように、Wistan の抱いている勇猛果敢なサクソン人のイメージは非常に美化され、半ば人間離れしたものである。そしてこの定義の中心をなしているのは、すべてのブリトン人を悪とみなし、例えそのブリトン人は優れた人格者であろうとも容赦しないという冷酷な価値基準を持つことこそサクソン人の義務だという考え方である。

しかし Wistan が唱える「真のサクソン人」のアイデンティティ観はすべてのサクソン人が共通的に持つものではなく、むしろ Wistan の少年時代の経験と関連するところが多い。彼は幼い時ブリトン人を兄弟のように愛するようになるが、後に彼自身がブリトン人により差別を受け、強烈な憎しみを抱くようになった。Wistan は「すべてのブリトン人を憎め」という掟を自分に課し、Edwin にも要求するが、この憎しみの強要から過去の自分を受け入れられず、ブリトン人を愛する自分の一側面を拒絶しようとする姿勢が読み取られる。

作品の終盤にかけて、Wistan はアーサー王に仕え、サクソン人虐殺に参加した老騎士 Gawain と対決し、巨竜 Querig を殺す。Gawain を倒し Querig の命を絶つことは、Wistan にとって自分のブリトン人的な一面との決別を象徴する行為と考えられる。しかし Gawain を倒した後に彼が感じるのは達成感ではなく、むしろ一種の虚無感(“despondent” 338)である。長年ブリトン人と生活することで、彼はブリトン人を完全に憎めない自分に気づき、「真のサクソン人」になれない自分を認める。新しいアイデンティティを手に入れることを断念することで、Wistan は二つの民族の側面を合わせ持つ自分を初めて受け入れる。

2. Edwin と「母親救出」の幻想

The Buried Giant は現時点でイシグロの唯一の三人称小説で、サクソン人の孤児 Edwin は視点人物の一人であり、全 17 章のうち 5 つの章が彼の視点から展開されている。Wistan と共に旅をしながら、彼はブリトン人を一人残らず憎むことこそ「真のサクソン人」の義務であると Wistan から教わった。彼は Wistan の教えを受け入れながらも、物語の最後に自分に優しく接してくれたブリトン人である主人公夫婦を憎まないことを決める。Edwin の選択によって、Wistan の「真のサクソン人」の虚構が完全に破綻することになる。

Edwin の人格の中心にあるのは「母親救出」の幻想である。幼い頃に母をブリトン人に攫われ、孤児になった Edwin 少年だが、非力な彼は村ではいじめられる存在になっている。さらに事故でドラゴンの幼体に噛まれ、これを不吉な兆しと信じる村人から追い出される羽目になる。屈折した幼少期を過ごした Edwin は、剣術の達人である Wistan に師事することで弱い自分から脱却し、「母を救出する勇者」になることを夢見る。

Edwin は何度も「母親救出」の場面の細部まで想像する。それは何年も前に誘拐された母親が三人の誘拐犯から何の危害も加えられないまま、彼と Wistan の到来を待っているというシーンだが、これは Edwin の記憶の欠片によって組み立てられた幻想である。子供時代の彼は母を救出することを念頭に置かなかったが、ある日一人で野外を散策するときに、縄で縛られた少女に出会い、彼女を助けた。その時少女は自分を誘拐したのは三人の少年で、彼らは時々このように彼女を縛り、これを見て楽しむと言った。作品内の他の女性の証言から推測できるように、成人女性が攫われると酷い目に遭う可能性が極めて高いのに、Edwin は執拗に指一

本触れられていない、ひたすら勇者になった自分を待ち続ける母親を想像する。これはまさに性に対して無知であり、かつ母親が残酷な仕打ちを受けていることから目を背けたいという Edwin に相応しい想像である。

作品の最後に Edwin は、自分が信じていた母の呼び声は自分を噛んだドラゴンの仕業に過ぎず、母親は既に亡くなっている事実に直面する。そこで母の救出が自分の作り出した虚構であり、勇者になれないことに気づく。母の喪失を受け入れられず、ヒーローとして生まれ変わりたい Edwin は、その師である Wistan と共に本当の自分を受け入れる結末を迎える。

3.『忘れられた巨人』に漂う周縁性

この部分では、先行研究で重点的に論じられた主人公 Axl をアイデンティティの視点から改めて分析する。ブリトン人である Axl はブリトン人の集落に住みながら、同族から差別的な扱い（集落の一番外側に住むように要求され、蝋燭を持つことが禁じられるなど）を受け、不満を抱くようになった。彼が提案した息子を探す旅は、即ち息子の存在を主軸にしたアイデンティティを新たに構築するプロセスである。作品の最後に明かされた息子が既に死んだ事実は、Axl が抱く新しい自分の幻想を打ち砕く。この点から考えると、新たなアイデンティティを手に入れる願望は実に作品の至る所に浸透しており、多様なテーマが読み取られる本作品の中心として考えられる。

4. 前後作品との関連性

Edwin の重要な特徴である「孤児」という概念は、イシグロの過去作品『わたしたちが孤児だったころ』(*When We Were Orphans*, 2000)でも重要な役割を果たしている。この作品における語り手 Banks は、子供の時に上海で失踪した両親を探すために数十年後に上海に戻り、やがて両親の救出が不可能だという事実に直面する。Edwin が編み出した「母親救出」の物語は、『わたしたちが孤児だったころ』の変奏であると考えられる。

またイシグロ作品には、「新しい自分」の幻想が度々登場人物によって構築される。*The Buried Giant* の前作 *Never Let Me Go* (2005)では、人間と似たような教育を受けたクローンたちが、臓器移植の運命から一時期逃れ、人間としての生を送る「延期」(“deferral”)を空想する。やがて「延期」の虚構性に気づいた主人公は、平然と死の運命を受け入れる。イシグロの最新作 *Klara and the Sun* (2021)では、人工知能として作られた語り手が、人間になって母親から愛されたいという欲望に目覚めるが、人工知能と人間との間の越えられない壁、そして人間への「変身」の不可能性に気づく。上記の二作品と *The Buried Giant* との比較を通して、「変身願望」がこれらの作品に共通して表出されることが分かる。このテーマの連続性の判明は、処女作 *A Pale View of Hills* (1982)に遡るイシグロ文学の核心を考える上で極めて重要である。

結論

本作品の登場人物を整理すると、彼らはそれぞれのアイデンティティを変えるために新しい自我を幻想するが、その幻想が実現不可能なものであるという事実に直面する。Wistan も Edwin も現在のアイデンティティから脱出するために手に入れたい自我を虚構し、最終的に失敗する。新しい自我を獲得できない代わりに、彼らは今までの自分についてより深く知ることができる。Wistan はサクソン人とブリトン人の両側面の共存に直面し、Edwin は母親の永遠の喪失を受け入れ、二人の努力は最終的に元の自分へと収束する。既に形成されたアイデンティティを変えることは、どれほど努力しても不可能なことである。しかしそれに向けて努力を払った自分を受け入れることこそ、人生の最大の課題であるという、イシグロ独自の美学が抽出できると考えられる。

テキスト

Ishiguro, Kazuo. *The Buried Giant*. Faber & Faber. 2015.

主要引用文献

Alter, Alexander. ‘For Kazuo Ishiguro, ‘The Buried Giant’ Is a Departure’. *The New York Times*, Feb. 20th, 2015.

Brent, Jonathan. ‘Violence, Memory, and History: Geoffrey of Monmouth and Kazuo Ishiguro’s The Buried Giant.’ *Cambridge Journal of Postcolonial Literary Inquiry*, vol. 8, no. 3, 2021, pp. 323-44.

Bukowska, Joanna. ‘Kazuo Ishiguro’s *The Buried Giant* as a Contemporary Revision of Medieval Tropes’, *Multiculturalism, Multilingualism and the Self*, edited by Jacek Mydla et al., 2017, pp. 29-43.

池園宏.「The Buried Giant におけるイシグロ文学の継承と発展」『英語英文學研究』62、2018 年、45-58 頁.

田尻芳樹、秦邦生編『カズオ・イシグロと日本:幽霊から戦争責任まで』水声社、2020.